小 児 科 学

1　構 成 員

	平成15年3月31日現在
教授	1人
助教授	1人
講師（うち病院籍）	2人　（　2人）
助手（うち病院籍）	4人　（　2人）
医員	3人
研修医	6人
特別研究員	0人
大学院学生（うち他講座から）	4人　（　0人）
研究生	3人
外国人客員研究員	0人
技官（教務職員を含む）	0人
その他（技術補佐員等）	0人
合　　計	24人

2　教官の異動状況

大関　武彦（教授）　（H9. 3～現職）
本郷　輝明（助教授）（H3. 6～現職）
藤井　裕治（講師）　（H11. 4～現職）
中川　祐一（講師）　（H5. 12～現職）
遠藤　　彰（助手）　（H3. 8～H15. 2），(H15. 3～周産母子センター講師昇任)
平野　浩一（助手）　（H10. 5～現職）
渡邉千英子（助手）　（H13. 1～現職）
古橋　　協（助手）　（H13. 4～現職）
岡田　周一（助手）　（H14. 7～現職）

3　研究業績

数字は小数2位まで。

	平成14年度
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	12編　（　4編）
そのインパクトファクターの合計	12.78
(2) 論文形式のプロシーディングズ数	0編
(3) 総説数（うち邦文のもの）	5編　（　5編）
そのインパクトファクターの合計	6.68
(4) 著書数（うち邦文のもの）	39編　（ 39編）

(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	2編　　（　1編）
そのインパクトファクターの合計	1.30

（1）原著論文（当該教室所属の者に下線）

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Watanabe C., Okada S., Fujii Y., Hongo T., Ohzeki T. : Reduction of discomfort of bone marrow aspiration and lumbar puncture with intravenous sedation based on patients' assessment. Med Pediatr Oncol 39 (4): 293, 2002.
2. Hongo T., Okada S., Inoue N., Yamada S., Yajima S., Watanabe C., Fujii Y., Horikoshi Y. : Two groups of Philadelphia chromosome-positive childhood acute lymphoblastic leukemia classified by pretreatment multidrug sensitivity or resistance in in vitro testing. Int J Hematol 76 (3): 251-259, 2002.
3. Fujii Y., Watanabe C., Okada S., Inoue N., Endoh A., Yajima S., Hongo T., Ohzeki T., Suzuki E. : Analysis of the circumstances at the end of life in children with cancer: A single institution's experience in Japan. Pediatr Int 45 (1): 54-59, 2003.
4. Hongo T., Watanabe C., Okada S., Inoue N., Yajima S., Fujii Y., Ohzeki T. : Analysis of the circumstances at the end of life with cancer: Symptom, suffering, and acceptance. Pediatr Int 45 (1): 60-64, 2003.
5. Hongo T., Ishida Y., Inada H., Hori H., Aoyanagi N., Kohdera U., Adachi S., Wakiguchi H., Ueda K. : Assessment of the quality of life of parents and children with acute lymphoblastic leukemia during treatment. Med Pediatr Oncol, 39 (4): 253, 2002.
6. 藤井裕治，渡邊千英子，岡田周一，本郷輝明，大関武彦: 病気説明を受けた小児血液・悪性腫瘍患児における病気の理解度．小児がん　39 (1): 24-30, 2002.
7. 岩島　覚，犬飼和久，大木　茂，西尾公男，濱島　宗，安田和志，杉浦　弘，河野親彦，田中敏博：重症新生児仮死に対する選択的頭部冷却療法施行時における呼吸，循環動態の変化　日本小児科学会雑誌，第106巻11号 1655-1659 2002.
8. 李　仁善，中西俊樹，衣　曼，藤澤泰子，中川祐一，大関武彦：11β-hydroxysteroid dehydrogenase（11β-HSD）阻害薬の長期投与が体重増加と糖代謝に与える影響についての検討．ホルモンと臨床　50 (12) ：1153-1156, 2002.

インパクトファクターの小計　［4.468］

B．筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1. Fukasawa H., Kato A., Fujimoto T., Suzuki H., Fujigaki Y., Yamamoto T., Endoh A., Yonemura K. and Hishida A. : Focal segmental glomeruloslerosos in a case of panhypopituitarism: a possible role of growth hormone treatment. Clinical Nephrology 58: 317-320, 2002.

インパクトファクターの小計　［1.638］

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

1．Taketani T., Taki T., Takita J., Tsuchida M., Hanada R., Hongo T., Kaneko T., Manabe A., Sako M., Horikoshi Y., Hayashi Y. : Mutations of the AML1/RUNX1 gene in pediatric hematological disorders. Med Pediatr Oncol, 39 (4): 325, 2002.

2．Taketani T, Taki T, Takita J, Ono R, Horikoshi Y, Kaneko Y, Sako M, Hanada R, Hongo T, Hayashi Y: Mutation of the AML1/RUNX1 gene in a transient myeloproliferative disorder patient with Down syndrome. Leukemia. 16: 1866-1867, 2002.

3．朝山光太郎，村田光範，大関武彦，伊藤けい子，杉原茂孝，岡田知雄，玉井　浩，髙谷竜三，花木啓一：小児肥満症の判定基準－小児適正体格検討委員会よりの提言．肥満研究　8 (2) 96 (204) -103 (211), 2002.

インパクトファクターの小計　［6.675］

（2）論文形式のプロシーディングズ

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

B．筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

（3）総　　説

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1．大関武彦，中川祐一，平野浩一，藤澤泰子：シンポジウム4－思春期と栄養　思春期の栄養と疾患. 思春期学20 (4) 440-445, 2002.

2．大関武彦，中西俊樹，藤澤泰子：Annuai Review 内分泌，代謝2003 Ⅰ．トピックス　A．代謝　1．小児の生活習慣病．中外医学社，1-7, 2003.

3．平野浩一，杉江秀夫：Osteodysplasia, lipomembranous polycystic-dementia膜形成性脂質異栄養症，別冊日本臨床　領域別症候群34，405-406, 2001

4．藤井裕治：終末期の子どもたちへの説明．緩和医療学 4 (3): 8 (200) -15 (207), 2002.

5．岡田周一，本郷輝明: 白血病－よりよい理解に基づく診療のために－II 治療，薬剤感受性試験．小児科診療65 (2); 233-238, 2002

インパクトファクターの小計　［6.675］

B．筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

(4) 著　　書

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 大関武彦：栄養（肥満），代謝疾患．阿部敏明，飯沼一宇，吉岡　博（編）小児科学・新生児学テキスト．診断と治療社，234-251, 2003 (3).
2. 大関武彦：下垂体後葉疾患．白木和夫，前川喜平（監）伊藤克巳，大関武彦，岡田伸太郎，近藤直実，杉本　徹，田澤雄作，田村正徳，埜中征哉，原田研介，福嶋義光（編）小児科学第2版．医学書院，1328-1333, 2002.
3. 大関武彦：副腎疾患．白木和夫，前川喜平（監）伊藤克巳，大関武彦，岡田伸太郎，近藤直実，杉本　徹，田澤雄作，田村正徳，埜中征哉，原田研介，福嶋義光（編）小児科学第2版．医学書院，1353-1359, 2002.
4. 大関武彦，中川祐一：先天性副腎過形成症，先天性副腎性器症候群．白木和夫，前川喜平（監）伊藤克巳，大関武彦，岡田伸太郎，近藤直実，杉本　徹，田澤雄作，田村正徳，埜中征哉，原田研介，福嶋義光（編）小児科学第2版．医学書院，1359-1363, 2002.
5. 大関武彦：低身長．大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，64-67, 2002.
6. 大関武彦：半陰陽．大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，216-219, 2002.
7. 大関武彦：高血糖．大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，291, 2002.
8. 大関武彦：低血糖．大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，292, 2002.
9. 大関武彦，藤澤泰子：浸透圧, 抗利尿ホルモン．大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，311, 2002.
10. 大関武彦：副腎皮質ステロイド，副腎皮質刺激ホルモン．大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，314-316, 2002.
11. 大関武彦，山田昌由：ケトン尿．大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，342-343, 2002.
12. 大関武彦：第8章　循環器疾患と看護　Bおもな疾患　①総論　②先天性心疾患　系統看護学講座専門23　小児看護学［2］小児臨床看護各論. 著者代表奈良間美保，医学書院，187-196, 2003.
13. 中川祐一：その他のステロイドホルモン合成・代謝障害. 白木和夫，前川喜平（監）伊藤克巳，大関武彦，岡田伸太郎，近藤直実，杉本　徹，田澤雄作，田村正徳，埜中征哉，原田研介，福嶋義光（編）小児科学第2版．医学書院，1364-1365, 2002.
14. 中川祐一：高身長．大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，68-69, 2002.
15. 中川祐一：性早熟．大関武彦，杉本徹，古川漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，210-213, 2002.
16. 平野浩一：全身的外傷．大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南

江堂，78-79, 2002.
17. 平野浩一：クレアチンキナーゼ．大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，305, 2002.
18. 本郷輝明：易疲労性. 大関武彦，杉本　徹，古川漸　，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，80-81, 2002.
19. 古橋　協：多尿．大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，202-203, 2002.
20. 古橋　協：乏尿．大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，204-206, 2002.
21. 古橋　協：尿素窒素，クレアチニン．大関武彦，杉本徹，古川漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，296-297, 2002.
22. 古橋　協：蛋白尿. 大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，336-337, 2002.
23. 古橋　協：血尿. 大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，338-339, 2002.
24. 岩島　覚：アシドーシス．大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，278-279, 2002.
25. 岩島　覚：第8章　循環器疾患と看護　Bおもな疾患　③後天性心疾患　④心臓律動の異常　⑤循環不全　&突然死　系統看護学講座専門 23　小児看護学［2］小児臨床看護各論．著者代表奈良間美保，医学書院，196-203, 2003.
26. 藤井裕治：GOT, GPT．大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ. 南江堂，298-299, 2002.
27. 渡辺千英子：LDH．大関武彦，杉本徹，古川漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，300, 2002.
28. 岡田周一：ロイシンアミノペプチダーゼ，γグルタミルトランスペプチダーゼ．大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ. 南江堂，301, 2002.
29. 遠藤　彰：性ホルモン, 性腺刺激ホルモン. 大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，312-313, 2002.
30. 藤澤泰子：やせ．大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，70-73, 2002.
31. 藤澤泰子：アルカリホスファターゼ．大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，302-303, 2002.
32. 山口徹也：アミラーゼ．大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，304, 2002.
33. 中西俊樹：肥満．大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，74-77, 2002.
34. 中西俊樹：総コレステロール，HDLコレステロール，中性脂肪．大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，294-295, 2002.

35. 本郷輝明：第10章血液・造血器疾患と看護，Bおもな疾患，①貧血，②出血性疾患，③顆粒球減少症，系統看護学講座専門23　小児看護学[2] 小児臨床看護各論，著者代表奈良間美保，医学書院，270-277, 2003.

36. 本郷輝明：第11章悪性新生物と看護，B おもな疾患，①総論　②おもな悪性新生物　③白血病　④脳腫瘍　⑤骨の腫瘍，系統看護学講座専門23　小児看護学[2] 小児臨床看護各論，著者代表奈良間美保，医学書院299-314, 2003.

37. 藤井裕治：第5章免疫・アレルギー性疾患，膠原病と看護，Bおもな疾患，①免疫（生体防御）機構　②免疫不全症　③アレルギーの発生機構　④アレルギー性疾患　⑤膠原病，系統看護学講座専門23　小児看護学[2] 小児臨床看護各論, 著者代表奈良間美保，医学書院，106-121, 2003.

B．筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

1. 大澤純子, 大関武彦：アルカローシス．大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，280-281, 2002.
2. 大谷行晴，大関武彦：白血球尿．大関武彦，杉本　徹，古川　漸，柳川幸重（編）小児診療ナビ．南江堂，344, 2002.

(5) 症例報告

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Fujisawa Y., Furuhashi K., Miyamoto T., Sano S., Nakagawa Y., Ohzeki T. : High-dose DDAVP partially relieved polyuria in a familial case of nephrogenic diabetes insipidus due to a novel mutation of V2 receptor gene. Horm Res 58 (suppl): 90, 2002.
2. 鈴木輝彦，遠藤　彰，平野浩一，岩島　覚，大関武彦，餅田良顯，杉江秀夫：胃軸捻転を合併したChilaiditi 症候群の1例．Frontiers in Gastroenterology 7 (4): 97, 2002.

インパクトファクターの小計　［1.30］

B．筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

4　特許等の出願状況

	平成14年度
特許取得数（出願中含む）	0件

5　医学研究費取得状況

	平成14年度
(1) 文部科学省科学研究費	3件 （ 260万円）
(2) 厚生科学研究費	3件 （ 135万円）
(3) 他政府機関による研究助成	0件 （　　万円）
(4) 財団助成金	2件 （1,030万円）
(5) 受託研究または共同研究	4件 （ 94万円）
(6) 奨学寄附金その他（民間より）	10件 （1,010万円）

(1) 文部科学省科学研究費

大関武彦　基盤研究（C）(2) かん地域保健活動による小児生活習慣病予防教育システムの構築．120万円（継続）

藤井裕治　科学研究費基盤研究（C）(2) 小児がん患者・家族とのコミュニケーションに関する研究（看護婦と医師の役割）90万円（新規）

渡邉千英子　若手研究B　小児がん患児における安全でQOLを向上させる骨髄穿刺・腰椎穿刺法の開発　50万円

(2) 厚生科学研究費

大関武彦　厚生労働省特定疾患対策研究事業「副腎ホルモン産生異常に関する研究班」60万円（継続）

大関武彦　子ども家庭総合研究事業「小児のライフスタイルと生活習慣病」25万円（継続）

藤井裕治（分担者）厚生労働省厚生科学研究効果的医療技術の確立推進臨床研究事業「短期（治療後5年以内）がん生存者を中心とした心のケア，医療相談等の在り方に関する調査研究」班　50万円（新規）代表者　静岡県立静岡がんセンター　山口　建

(4) 財団助成金

大関武彦　国際交流医学研究振興財団「小児肥満と肥満関連遺伝子多型の相関」1,000万円（新規）

6　特定研究などの大型プロジェクトの代表，総括

7　学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0件	3件
(2) シンポジウム発表数	0件	4件
(3) 学会座長回数	1件	8件
(4) 学会開催回数	0件	0件
(5) 学会役員等回数	0件	20件
(6) 一般演題発表数	7件	

(1) 国際会議等開催・参加：

4) 一般発表

口頭発表

1. Hongo T., Ishida Y., Inada H., Hori H., Aoyanagi N., Kohdera U., Adachi S., Wakiguchi H., Ueda K. : Assessment of the quality of life of parents and children with acute lymphoblastic leukemia during treatment. SIOP (International Society of Pediatric Oncology), 34th meeting. 2002, 9, 20, Porto, Portugal,

ポスター発表

1. Watanabe C., Okada S., Fujii Y., Hongo T., Ohzeki T. : Reduction of discomfort of bone marrow aspiration and lumbar puncture with intravenous sedation based on patients' assessment. SIOP (International Society of Pediatric Oncology), 34th meeting. 2002, 9, 19. Porto, Portugal,
2. Endoh A., Nakanishi T., Ohzeki T: Relevance of proto-oncogene induction for the steroidogenesis by Insulin-like growth factor I in human adrenal carcinoma cells. International Congress on Hormonal Steroids and Hormones and Cancer, October 2002, Fukuoka, Japan
3. Endoh A., Nakanishi T., Ohzeki T, Kobashi G., Ishimaru Y., Kanamori M: Serum Leptin and Soluble Leptin Receptor in Normal Subjects. The Endocrine Society 's 84 th Annual Meeting, June 2002, SanFrancisco, CA
4. Fujisawa Y., Furuhashi K., Miyamoto T., Sano S., Nakagawa Y., Ohzeki T. : High-dose DDAVP partially relieved polyuria in a familial case of nephrogenic diabetes insipidus due to a novel mutation of V2 receptor gene. 41th Annual Meeting of the European Society for Paediatric Endocrinology. September 25-28, 2002, Madrid, Spain.
5. Chapman KE, Lyons V, Hammersley C, Nakagawa Y, Seckl JR: A cell-type-specific repressor in the promoter of the 11β-hydroxysteroid dehydrogenasetype 1 gene. International congress on hormonal steroids and hormones and cancer. 2002. 10. 23 Fukuoka (Japan)
6. Renshan L, Nakanishi T, Fujisawa Y, Endoh A, Nakagawa Y, Ohzeki T: Different responsiveness in body weight to 11β-hydroxysteroid dehydrogenase inhibition by glycyrrhetinic acid in obese and lean Zucker rats. International congress on hormonal steroids and hormones and cancer. 2002. 10. 22 Fukuoka (Japan)

(2) 国内学会の開催・参加

1) 学会における特別講演・招待講演

1. 大関武彦：小児肥満の治療．5th Lilly International Symposium. October 19, 2002, Kobe, Japan.
2. 大関武彦：生活習慣病・肥満の予防にむけて－成人期／小児期／出生前．第8回　山口県内分泌研究会，2002年8月，宇部市．
3. 大関武彦：子供の健康と栄養．砂糖科学会議．2003年2月，東京都．

2）シンポジウム発表

1. 大関武彦（2002）シンポジウム・思春期と栄養「思春期の栄養と疾患」第21回日本思春期学会，8月（金沢市）
2. 大関武彦，藤澤泰子（2002）小児肥満研究の進歩「小児肥満の出生前因子」第16回日本小児脂質研究会，11月（浜松市）
3. 中川祐一（2002）小児肥満研究の進歩「生活習慣病の出生前からの対応」第16回日本小児脂質研究会，11月（浜松市）
4. 中西俊樹（2002）小児の脂質代謝にかかわる因子－栄養，ホルモン，薬物－「小児期の体脂肪とレプチン」第16回日本小児脂質研究会，11月（浜松市）

3）座長をした学会名

大関武彦　第105回日本小児科学会
第27回日本小児皮膚科学会
第21回日本思春期学会
第36回日本小児内分泌学会
第23回日本肥満学会
11th International Congress on Hormonal Steroids
第16回日本小児脂質研究会
第13回日本内分泌学会Up-date

中川祐一　第36回日本小児内分泌学会

5）役職についている学会名とその役割

大関武彦　日本小児科学会　代議員，認定医試験運営委員
日本内分泌学会　代議員，庶務委員
日本内分泌学会東海支部　副支部長
日本ステロイド学会　理事
日本思春期学会　理事
日本肥満学会　評議員，編集委員，監事
日本病態栄養学会　評議員
日本小児内分泌学会　理事
日本小児皮膚科学会　運営委員
日本小児脂質研究会　運営委員
日本小児代液研究会　幹事
日本Auxology研究会　世話人
日本小児科学会静岡地方会　理事長

本郷輝明　日本小児血液学会　評議員
日本小児科学会　代議員
日本小児科学会静岡地方会　理事

中川祐一　日本内分泌学会　代議員
日本ステロイドホルモン学会　評議員
遠藤　彰　日本内分泌学会　代議員
日本ステロイドホルモン学会　評議員

8　学術雑誌の編集への貢献

	国　内	外　国
学術雑誌編集数（レフリー数は除く）	2件	1件

(1) 国内の英文雑誌の編集
大関武彦　1. 日本肥満学会誌「肥満研究」　編集委員
2. 今日の小児治療指針　編集

(2) 外国の学術雑誌の編集
大関武彦　1. Clinical Pediatric Endocrinology　Editorial Board

(3) 国内外の英文雑誌のレフリー

9　共同研究の実施状況

	平成14年度
(1) 国際共同研究	0件
(2) 国内共同研究	0件
(3) 学内共同研究	0件

10　産学共同研究

	平成14年度
産学共同研究	0件

11　受　　賞

12　研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 小児肥満におけるレプチンおよび摂食調節ペプチド遺伝子

（目的）レプチンを含むホルモンの相互関連について検討するとともに肥満発症におけるレプチンの作用機序につき明らかにする。MC4受容体β3受容体, PPARγ遺伝子について検討する。（概要）レプチンの発見以来，肥満症とレプチンの関連につき様々な研究が施行されるようになったがレプチンを中心としたホルモン調節機序については未知のことがらが多く残されている。当研究班では小児肥満とレプチンを中心としたホルモンとの関連につき様々な角度から解析を行い，肥満症とレプチンネットワーク機構の関連につき検討を進めている。（目的の達成度）過体重度とレプチンとの関連には小児期には性差は認められないが思春期になると明確な男女差があることが明らか

にされた。性ホルモンのみならず他の摂食調節ペプチドやホルモンとの関連についての検討が必要である。その他のペプチドないしその受容体の遺伝子多型について肥満・非肥満の比較を開始した。
（研究担当者：大関武彦，中川祐一，遠藤　彰，平野浩一，藤澤泰子，中西俊樹）

2. 糖尿病性高血圧発症因子の解明
（目的）糖尿病の合併症としてよく知られている高血圧の発症因子を明らかにすること。特に内分泌因子の関与を検討する。
（概要）高血圧が糖尿病に併発することはよく知られているがその病因については必ずしも明らかにされていない。当研究班では糖尿病性高血圧の発症にステロイドホルモンの代謝異常が関与しているのではないかと推論し，研究を進めている。
（目的の達成度）ストレプトゾトシン投与により作製した糖尿病ラットでは腎臓における11β-hydroxysteroid dehydrogenase type 2（11HSD2）（活性型のグルココルチコイドを不活性型にする作用を持つ）の遺伝子発現および酵素活性の低下を示すことが明らかになり，糖尿病性高血圧の発症因子としてステロイドホルモン代謝異常が関与していることが示唆された。現在その調節機序につき検討を進めているところである。
（研究担当者：中川祐一，中西俊樹，藤澤泰子，古橋　協，岩島　覚，大関武彦）

3. 肥満発症におけるステロイドホルモン代謝異常の関与についての検討
（目的）特に出生前における肥満の発症メカニズムにステロイドホルモン代謝異常が関与していることを明らかにする。
（概要）肥満とグルココルチコイドの関係についてはグルココルチコイドが過剰に産生もしくは外因性に過剰に投与された場合において肥満が発症することなどにより知られている。このことから当研究班では肥満すなわち脂肪の調節にステロイドホルモンが重要な役割を示しているのではないかと考え，グルココルチコイドの代謝と肥満との関連につき研究を進めている。
（目的の達成度）新生児期よりグルココルチコイドの代謝にとって重要な酵素である11HSDの活性を障害させ続けると成人になってから肥満および糖代謝異常が出現することが動物実験より強く示唆された。
（研究担当者：大関武彦，中川祐一，中西俊樹，李　仁善，藤澤泰子）

4. 小児がん患児の終末期の検討
1994年から2000年までの7年間に，浜松医大付属病院小児科で治療をうけ死亡した小児がん患児28人の終末期の状況を調べ，血液・リンパ腫（LL）群と固形腫瘍（ST）群に分けて検討した。ターミナルケアは20人（71.4%）に施行された。在宅中心のターミナルケアは11人に行われ，在宅死亡数は8人であった。特にST群では17人全員にターミナルケアが施行され在宅の死亡は7人（41.2%）であった。死因は治療関連死6人（21.4%）（LL群54.5%，ST群0%），腫瘍死22人（78.6%）であった。終末期の症状は食欲不振（100%），呼吸困難（82.1%），疼痛（75.0%），全身倦怠感（71.4%）に認められ，精神的不安定（53.6%），意識障害（35.7%）に認められた。死の予感や不安や

受容の言語的表現は9人（32.1%）に認められ報告した。

（本郷輝明，藤井裕治，岡田周一，渡邉千英子）

13　この期間中の特筆すべき業績，新技術の開発

14　研究の独創性，国際性，継続性，応用性

1. 小児白血病細胞のin vitro感受性と予後についてprospectiveに調べる共同研究が日本小児白血病研究会で進行中。

15　新聞，雑誌等による報道

1. 子供の救急テーマに　講演会とパネル討論会　子供の健康週間事業「安心して暮らせるこどもの救急医療イン浜松」静岡新聞　平成14年9月17日
2. 安心できる小児救急医療を　浜松　親，医師らが意見交換　静岡新聞　平成14年10月21日
3. 市夜間救急室に小児科医　シンポ報告　朝日新聞　平成14年10月21日